

評価条件づけを用いた顕在的・潜在的シャイネスの変容可能性の検討

藤井 勉^{1,5} 澤海 崇文^{2,5} 相川 充^{3,5} 中野友香子⁴

¹ 長崎大学大学教育イノベーションセンター ² 神奈川大学人間科学部

³ 筑波大学人間系 ⁴ 科学警察研究所 ⁵ 教育テスト研究センター

本研究では、自己報告で測定される顕在的シャイネスと、潜在的な測定法を用いて測定される潜在的シャイネスという2種類のシャイネスについて、評価条件づけを用いて変容可能性を検討した。19歳-48歳の男女38名に対して顕在的・潜在的シャイネスを測定したのち、コンピュータを利用した評価条件づけ課題を実施し、その後のシャイネスの変化を追った。分析の結果、顕在的シャイネスの得点は有意な減少が認められた一方で、潜在的シャイネスの得点には変化は見られなかった。この点は先行研究からの予想とは異なるものであったが、変化しにくいと考えられている顕在的シャイネスが低下したことは注目すべき点といえる。今後は、本研究で用いた評価条件づけ課題の妥当性も含めて、更なる検討を要する。

キーワード：顕在的・潜在的シャイネス，潜在連合テスト，評価条件づけ，変容可能性

1.はじめに

近年、潜在連合テスト (Implicit Association Test; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT) などの潜在的測度の発展に伴い、自身でも意識することの難しい「潜在的な」態度やパーソナリティの測定が盛んになっている。こうした流れの中で、相川・藤井 (2011) や藤井・相川 (2013) は、この IAT を用いて潜在的シャイネスを測定し、潜在的シャイネスが高い人ほど、他者から見た対人緊張 (人前で赤面しやすい、人前で気が散って考えがまとまらない) が高いことを示した。また、いずれの研究においても対人緊張に対し、意識的なアクセスが容易な、いわゆる自己報告による「顕在的」シャイネスの影響は見られなかった。すなわち、対人緊張の低減を目指す際に、これまで介入が試みられてきた顕在的なシャイネスのみならず、潜在的なシャイネスを変容させることの重要性が示された。

2.目的

これまでいくつかの研究において、潜在的態度の変容可能性が検討されている。たとえば尾崎 (2006) は、評価条件づけと呼ばれる手法 (詳細は 3.方法の 3.3 手続きの箇所で述べる) を用いて、特定の図形への潜在的選好を変容させることに成功したが、顕在的な選好には有意な変化はみられなかった。本研究ではこのパラダイムを参考にして評価条件づけを行い、顕在的・潜在的シャイネスが変容するか否かを検討する。

3.方法

3.1 参加者 19-48歳の男女38名 (平均年齢 23.57歳, $SD = 5.58$) が実験に参加した。

3.2 材料 シャイネス IAT (相川・藤井, 2011; 藤井・相川, 2013), Trait Shyness Scale (相川, 1991: 以下 TSS) 16項目, シャイネス IAT の“シャイな”, “社交的な”カテゴリの刺激語 (各5項目。“内気な”, “控えめな”, “大胆な”, “遠慮のない”など), 評価条件づけ課題 (後述) を用いた。他に複数の特性を測定したが、本研究の内容と関連しないため省略する。

3.3 手続き 参加者はインターネットを通じて実験に参加した。まず参加者は IAT, TSS

への回答および、シャイネス IAT の刺激語 10 項目がどの程度自分に当てはまるかを評定した。自己報告尺度と IAT の実施順序はカウンターバランスをとった (時点 1)。

その後、評価条件づけ課題を行った。シャイネス IAT で使用した“シャイな”, “社交的な”カテゴリの語を画面上に続けて呈示し, “シャイな”に属する語はキーボード上で自分から物理的に遠い位置にある“6”キーを, “社交的な”に属する語は自分に近い位置にある“B”キーを押して分類するよう教示した。課題中は画面の上部に“シャイな”, 画面下部に“社交的な”というカテゴリ名を常に呈示し, 分類には利き手の人差し指だけを用いるよう教示した。コンピュータ画面は平面であるが, 遠近感を持たせるために“社交的な”のカテゴリ名は“シャイな”カテゴリ名より大きいフォントで表示した。このようにして, シャイネス関連語は自分から遠ざけ (i.e., 回避), 社交性関連語は自身に近づける (i.e., 接近) ように分類させた。各刺激語につき 10 回ずつ呈示し, 参加者は合計 100 回の分類を行った。

その後, 再度 IAT を実施し, “シャイな”, “社交的な”カテゴリの刺激語 10 項目がどの程度自分に当てはまるかの評定も求めたのち (時点 2), 実験を終了した。時点 1, 2 とともに, 自己報告尺度は 5 件法 (1: 全くあてはまらない—5: よくあてはまる) で回答を求めた。

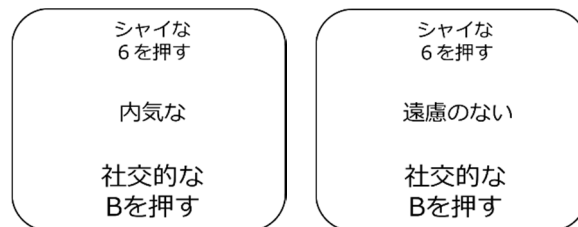


図 1 評価条件づけ課題の画面の例。左例では「6」、右例では「B」キーの押下が正答。

4.結果

4.1 データの整理 IAT の平均反応時間が極端に遅い, もしくはエラー数が極端に多い (いずれも $M+3SD$) 参加者 (合計 3 名) を以降の分析から除いた。各尺度は逆転項目を処理した上で相加平均を求め, IAT は Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) の D 得点を算出した。いずれも, 得点が高いほど当該尺度名の傾向が強いことを示す。

4.2 各変数間の関連 各変数間の相関係数および記述統計量を求めた (表 1)。時点 1 においてシャイネス IAT と TSS は正相関を示したが有意ではなかった。TSS はシャイネス関連語と強い正の相関を, 社交性関連語とは強い負の相関を示した。シャイネス関連語と社交性関連語は中程度の負の相関を示した。

また, 時点 1 と 2 の両方で測定したシャイネス IAT やシャイネス関連語, 社交性関連語の評定は, .56-.88 という正の相関を示していた。また, 時点 1 および時点 2 のシャイネス IAT 得点は, 0 からの差が有意であり ($ts \geq 2.07, ps \leq .05$), “自己—シャイな”よりも“自己—社交的な”の組み合わせの方が強い連合を示していた。

表 1 各尺度間の相関係数および偏相関係数, 記述統計量

	1	2	3	4	5	6	M	SD	α
1 TSS	—						3.07	0.79	.93
2 シャイネス IAT1	.17	—					-0.15	0.42	—
3 シャイネス関連語1	.86**	.18	—				3.27	0.88	.83
4 社交性関連語1	-.67**	.01	-.53**	—			2.93	0.64	.59
5 シャイネス IAT2	.27	.56**	.13	-.05	—		-0.17	0.42	—
6 シャイネス関連語2	.68**	.18	.80**	-.42*	.15	—	3.08	0.87	.89
7 社交性関連語2	-.73**	-.08	-.60**	.88**	-.11	-.43*	2.98	0.65	.67

* $p < .05$, ** $p < .01$ 注) 尺度名の右の数字は時点 1, 2 をそれぞれ示す。

4.3 評価条件づけの影響 時点 1 と 2 のシャイネス IAT, シャイネス関連語, 社交性関連語のそれぞれについて, 対応のある t 検定を実施した。その結果, シャイネス IAT 得点 ($t = 0.29, d = .05, ns$), 社交性関連語得点には有意な変化はみられなかった ($t = 0.44, d = .04, ns$)。一方, シャイネス関連語得点には有意な変化がみられ ($t = 2.21, d = .25, p = .04$), 時点 1 ($M = 3.27$) より時点 2 ($M = 3.07$) の方が低かった。

5. 考察

評価条件づけ課題の前後において, 潜在的シャイネスの指標であるシャイネス IAT の得点に有意な変化はみられなかった。これは尾崎 (2006) と整合せず, 評価条件づけ課題の操作が不十分だったか, 潜在的シャイネスは容易には変容しないという解釈が考えられる。

一方, 自己報告によるシャイネス関連語への評定は, 評価条件づけ課題の前後で有意に減少しており, これも尾崎 (2006) と整合しない。しかし, 顕在的・潜在的シャイネスは容易には変容しないことが複数の研究 (相川, 1998; 藤井・澤海・相川, 2015) で示されている中で, 実際に顕在的シャイネスが変容していたことは注目に値すると思われる。

ただし, 尾崎 (2006) が行った評価条件づけ実験では, 図形の好みという「態度」を対象にしており, 特定の図形を自身に接近させることで, その図形への態度がポジティブになると解釈されていた。しかし, 本研究ではシャイネスという「パーソナリティ」を対象にしている。画面上に呈示されたシャイネス関連語を回避する (i.e., 遠ざける) ことによって, 「シャイネス」への態度自体はネガティブに変化するかもしれないが, この操作が, IAT で測定される「自己」と「シャイな」の連合を弱めるといった影響を与えるか否かは定かでない。この点は, 顕在的・潜在的シャイネスはどのようにすれば変容するのか, というプロセスの解明と並行して検討すべきであろう。

本研究は顕在的なシャイネスが変容したという結果を得た一方, 上述の課題を残している。今後は課題の吟味を含め, パラダイムを洗練させた上で, 更なる検討が必要である。

参考文献

- 相川充 (1991) 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62:149-155
- 相川充 (1998) シャイネス低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 東京学芸大学紀要第一部門 教育科学, 49:39-49
- 相川充・藤井勉 (2011) 潜在連合テスト(IAT) を用いた潜在的シャイネス測定の試み 心理学研究, 82:41-48
- 藤井勉・相川充 (2013) シャイネスの二重分離モデルの検証——IAT を用いて—— 心理学研究, 84:529-535
- 藤井勉・澤海崇文・相川充 (2015). シャイネス IAT の再検査信頼性——潜在的シャイネスの変容可能性も含めて—— 心理学研究, 86:361-367
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74: 1464-1480
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003) Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85:197-216
- 尾崎由佳 (2006) 接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容 実験社会心理学研究, 45:98-110